

令和7年度 学力向上指導改善プラン

学校教育目標 夢や希望をもち、目標に向かってたくましく生きる生徒の育成

目指す子どもの姿 ・真理を探究し、自ら意欲的に学ぶ生徒 ・道徳性を身につけ、社会的模範となる善い行いを心がけ自分や他人を大切に、共に生きる生徒 ・美徳を意識し、正しく判断し、粘り強く行動する生徒

変容を目指す資質・能力 a 知識及び技能 b 思考力、判断力、表現力 c 学びに向かう力、人間性等 d 情報活用能力 e 課題解決能力 f 学び続ける力 g コミュニケーション能力

三田市立富士中学校

校長 奥 雅 喜

研究主体【 研究推進委員会 】

前年度		継続性	4月(※全国学力・学習状況調査の結果などを受けて年度途中で変更する場合は削除、追記部分を赤字で修正)				
学力向上に向けた重点的な目標	年度末評価(前年度の成果と次年度に向けた課題等)		評価	学力向上に向けた重点的な目標(変容を目指す資質・能力)	成果となる目標(指標となる数値等)	具体的な行動目標(成果目標達成のための具体的な手立て等)	今年度の成果と来年度に向けた課題等
・特別支援教育の視点を活かした主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善	○全校生徒を対象とした「授業評価アンケート」を年に2回実施し、そこで得られた回答をもとに、「振り返りの充実」などの授業改善に全教職員で取り組んだ。 ◆長期休業中に、授業評価アンケートによって明らかとなった課題に関する校内研修を実施することができなかつたため、研修の機会の充実を図る。	B	・特別支援教育の視点を活かした主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善(a・b・c・e・g)	・「質問調査」において、「学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」の問いにおける肯定評価が全国平均を上回る。 ・「質問調査」において、「学習した内容について、分かった点やよく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができている」の問いにおける肯定評価が全国平均を上回る。 ・学校評価アンケートにおいて、「授業が分かりやすい」という問いにおける肯定評価が80%を上回る。	・視覚支援などさまざまな支援を取り入れた誰もがわかる授業づくり、「何をどう学ぶか」を重視し、「見方・考え方」を働かせて、「主体的・対話的で深い学び」のある授業づくりに取り組む。 ・互見授業期間を設定し、教師間での意見交流や校内研修を実施する。 ・毎回の授業のなかで「めあて」を確認する場と、それに対する「振り返り」を行う場を設定する。 ・教員用、生徒用電子教科書を効果的な場面で活用する。	○全校生徒を対象とした「授業評価アンケート」を年に2回実施し、そこで得られた回答をもとに、「振り返りの充実」などの授業改善に全教職員で取り組んだ。その結果、成果となる目標数値を達成することができた。 ○すべての黒板に「めあてカード」を貼ることによって、授業のねらいが明確になり、見直しをもって学習に臨むことができる生徒が増えた。 ◆長期休業中に、生徒用電子教科書の活用を目的とした校内研修を行うことで、生徒用電子教科書の活用に関する研究の基礎を築く必要がある。	A
・ICTを活用した授業の推進	○生徒が自らの考えをまとめ、整理するための手段としてミライシードを活用するなど、効果的な場面でのICT活用が進んだ。 ◆全国学力・学習状況調査「質問調査」において、「ICT機器を利用して、わからないことがあったときに、すぐ調べることができる」の問いにおける肯定的評価が全国平均を下回ったため、家庭学習などでタブレットを活用する方法についての指導を充実させる。	A	・ICTを活用した授業の推進(b・d・e)	・「質問調査」において、「授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか」の問いにおける肯定評価が全国平均を上回る。 ・「質問調査」において、「自分の考えや意見をわかりやすく伝えることができる」の問いにおける肯定評価が全国平均を上回る。 ・「質問調査」において、「学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思いますか」の問いにおける肯定評価が全国平均を上回る。	・ミライシードやGoogleクラスルームなどの活用方法について、校内で研修を実施する。 ・ICTを活用した授業実践について、校内で共有を行い、教員全体の指導力向上を図る。 ・生徒が、グループワークや実験、プレゼンテーションなど、様々な学習活動において、ICTを活用する授業を推進する。	○互見授業期間に、ICTを活用した授業を見学し合うことで、教員のICTを活用した授業改善に取り組む意欲が高まった。 ○総合を中心に、自らの考えをスライドなどにまとめ、発表する機会を増やしたことで、成果となる目標数値を達成することができた。 ◆情報を収集・整理することに対して、苦手意識がある生徒が多いことから、図や表、思考ツールを使って情報をまとめる学習の機会を増やす必要がある。	A
・家庭学習の充実	○1学期に「家庭学習の手引き」を配布し、各教科における家庭での学習の要点を明確にすることで、効果的・継続的に家庭学習に取り組む生徒が増えた。 ◆タブレットの持ち帰りを進めることができたが、各教科で課題配信を行うことが少なかったため、課題の配信方法など、校内研修の機会の充実を図る。	B	・家庭学習の充実(a・c・f)	・「質問調査」において、「学校の授業時間以外に、普段(月曜日から金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、勉強しますか(学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含まれます)」の問いにおいて、1時間以上の回答が全国平均を上回る。	・各教科で計画的に家庭学習の課題を与えるとともに、「家庭学習の手引き」を作成して家庭への啓発を行い、基礎学力の向上と家庭学習の習慣化のさらなる定着・充実を図る。 ・ドリルパークでの課題配布など、生徒の習熟度に応じた課題を設定し、個に応じた家庭学習の充実を図る。	○年度の初めに「家庭学習の手引き」を配布し、各教科における学習のポイントを明確にすることで、成果となる目標数値を達成することができた。 ○懇談等で生徒の学習状況を保護者と共有することで、生徒の継続的な家庭学習につなげることができた。 ◆ドリルパークの活用が朝学習に限られたため、長期休暇などにおける家庭学習での活用を推進する必要がある。	B
・学力補充	○「ひょうごがんばりタイム」を実施し、数学の基礎基本や継続的な学習習慣を身に着けさせることができた。 ◆テスト前や長期休業中に学習相談を実施したものの、参加生徒が少数に限られていたため、テスト期間以外にも学力補充の場の拡充を図る。	B	・基礎学力の定着(a・c)	・全国学力・学習状況調査の「知識・技能に関する問題」において、全国平均を+3ポイント上回る。 ・「質問調査」において、「先生は、授業やテストで間違えたところや理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思う」の問いにおける肯定評価が全国平均を上回る。	・「朝学習」においてドリルパークを活用し、生徒が自ら問題を選択できるようにし、個別最適化した学びを目指す。 ・テスト前や長期休業中に、学習相談を実施する。 ・放課後や長期休業中に、「ひょうごがんばりタイム(地域人材による指導)」を実施する。また、地域実施の「寺子屋」を案内し、指導者との連携を継続する。	○「ひょうごがんばりタイム」を実施し、数学の基礎基本や継続的な学習習慣を身に着けさせることができた。 ◆正答率に関する目標数値は達成できたが、「教員が分かるまで教えてくれる」という質問に関しては、目標数値に到達することができなかった。 ◆学習相談の実施が、昨年度同様、テスト前に限られていたため、開催回数の方の更なる充実を図る必要がある。	B
・読書活動の充実	○1年生を対象に、各学期の最初に朝読書の期間を設けたことで、生徒の読書習慣の形成につながった。 ◆学級文庫を設置したものの、利用者が少数に限られていたため、内容のさらなる充実を図る。	B	・読書活動の充実(c・f)	・学校評価アンケートにおいて、「生徒は読書をよくしている」という問いにおける肯定評価の割合が半数を上回る。 ・読書活動の啓発を行い、図書室の利用者数が前年度比で1.2倍増加する。	・年度の始め(1年生は月初めに)朝読書を行い、読書習慣を定着させる。 ・図書委員会と連携し、読書活動の啓発を行う。 ・図書委員会と連携し、学級文庫を設置する。 ・総合をはじめとする各教科での調べ学習で図書館を活用し、学習センターとしての活用を図る。 ・給食準備中などに読書活動を推進する。	○図書委員会が中心となって、図書便りの発行やポスターの作成など、読書活動の推進を行った。 ◆様々な取り組みを実施するも、生徒の読書習慣の十分な形成にはつながらず、成果となる目標数値は達成することができなかった。 ◆図書室の利用者数は、前年度比で約9パーセント減少し、目標数値に到達することができなかった。	C
・学力向上に向けた小・中連携の充実	○中学校区で学力・学習状況調査の合同分析を行い、各校の課題を明らかにすることで、小中を見通した授業改善の取り組みを検討することができた。 ○夏季休業中に、小学校と合同で進路に関する研修を行うことによって、カリキュラム連携を強化することができた。 ◆中学校1年生を対象に、学習面で困ったことをアンケートで集約し、小学校の教員と共有することで、中1ギャップの解消に向けた連携の強化を図る。	A	・学力向上に向けた小・中連携の充実(a・b)	・中学校区4校との連携を図り、中1ギャップを解消するとともに、「学校評価」アンケートにおいて、「学校生活が楽しい」と答える生徒の割合が80%を上回る。	・学校園所連携交流会を年間3回開催し、授業参観と共に、「学習指導」「生徒指導」「道徳・人権教育」「特別支援教育」の4部会で交流する。 ・小中一貫教育の推進に向け、カリキュラム連携に取り組んでいく。 ・全国学力・学習状況調査結果について、合同分析を行い、課題と成果の共有を行う。 ・中学校1年生を対象に、学習面で困ったことをアンケートで集約し、小学校の教員と共有することで、中1ギャップの解消に向けた連携の強化を図る。	○各学期に一度、中学校区で授業参観や教員同士の交流会を開催し、各校の研究推進の取り組みを共有することで、成果や課題を明確にすることができた。 ○中学1年生を対象に、学習面で困ったことをアンケートで集約し、小学校の教員と共有することで、中1ギャップの解消に向けた連携の強化を図った。その結果、成果となる目標数値の達成につなげることができた。 ◆小中一貫教育の推進に向け、カリキュラムマネジメントに関する研修の機会を持つ必要がある。	A